

傾向と対策 2026

[入試科目別傾向と対策]

〔公募制推薦入試Ⅰ期(教科型)〕

■英語		12
■数学		14
■国語		16

※傾向と対策作成：河合塾グループ 株式会社 KEI アドバンス

英 語

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
11/22 11/23 両日共通	第1問	空所補充問題（文法・語法、熟語）	やや易
	第2問	整序英作文問題（文法・語法、熟語）	標準
	第3問	会話文完成問題	標準
	第4問	会話文および広告読解問題	標準
	第5問	長文読解問題	標準
	第6問	長文読解問題	標準

※2026年度より公募制推薦入試Ⅰ期（教科型）は2日程実施となった。

●出題形式

椋山女学園大学の公募制推薦入試Ⅰ期（教科型）では英語が課され、国語、数学、英語の中から2教科2科目を選択する（一部の学部学科では英語は必須科目となる）。全問マークシート方式である。試験時間は2科目あわせて連続した120分となっており、1科目あたり60分程度が解答時間の目安となる（教育学部のみ例外あり）。なお、科目間の問題難易度の差による有利不利をなくするため、得点調整を行う場合があり、その調整方法も公表されている。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

英語コミュニケーションⅠ、英語コミュニケーションⅡ（リスニングを課さない）

b. 出題内容（大問構成）

文法・語法の空所補充問題1題、整序英作文問題1題、短めの会話文完成問題1題、長めの会話文読解問題と広告読解問題によって構成された大問が1題、長文読解問題2題の計6題（小問数は40問）

●問題の傾向

第1問は、単文中の空所に適切な語句を補充する問題であり、高校で習得すべき語彙・文法が中心となる。教科書や準拠教材レベルの内容が多く、品詞、時制、助動詞、関係詞、前置詞、語法などの基本事項が幅広く出題される。設問自体は比較的取り組みやすいが、選択肢が似ている場合もあり、知識を曖昧にせず正確に定着させておくことが重要である。第2問は整序英作文で、語順や構文理解が問われる。日本語訳はないが、第1問と同様に授業内容を踏まえて解答できる問題である。熟語や構文の知識だけでなく、主語・動詞の対応や修飾関係を意識して文全体を組み立てる力が必要となる。単なる暗記ではなく、英文の骨組みを見抜く力が求められる。第3問は短い会話文完成問題で、口語表現や省略に注意しつつ、会話の流れに沿った自然な応答を選ぶ必要がある。場面設定が短いやり取りの中に凝縮されているため、前後の発話から状況や話者の意図を素早く把握することが重要である。学校の授業では触れる機会の少ない表現も見られるが、会話の流れを丁寧に追えば十分対応可能である。第4問は会話文読解と広告読解で構成される。会話文では空所補充や内容理解が問われ、話者の立場や視点の違いを整理しながら読むことが重要である。広告読解では、必要な情報を短時間で見つける力が求められるため、設問で問われるポイントを先に押さえたうえで本文を確認すると効率よく情報を処理できる。いずれも、細部の表現だけでなく、全体の目的や流れを把握することが得点につながる。第5問・第6問は長文読解で、内容一致や語句の意味、表題選択などが出題される。文章量は比較的多いが、語彙レベルは標準的であり、日頃から読解練習を行っていれば十分対応可能である。設問は、部分的な意味理解だけでなく、文章全体の論理展開や筆者の主張を踏まえて判断するものも含まれるため、段落ごとの要点を押さえながら読み進めることが大切である。総じて、公募制推薦入試Ⅰ期（教科型）では、基礎的な知識を正確に使いながら、標準レベルの英文を丁寧に読み取る力が問われている。

●難易度

設問の難易度自体は入試標準レベルであり、基礎～標準の知識が定着していれば十分対応可能である。一方で、会話文、広告、長文2題など複数の分量のある素材を60分で処理する必要があるため、時間的余裕がない中で読解力と処理能力の双方が求められる試験である。

英 語

学習対策

既習内容を徹底して確認し、定着させることが合格への確実な要因である。高等学校で学んだことや教科書、テキスト、問題集に忠実に取り組み、わからないことやできないものがないようにしておくことは必須である。そのうえで、公募制推薦入試Ⅰ期（教科型）では、そのボリュームの多さや時間的な制約から、知識を「知っている」だけでなく、短時間で正確に使えるようにしておく必要がある。

●文法・語法の知識を正確に身につけたうえで、試験に臨もう

第1問・第2問では、文法・語法・語順の知識がそのまま得点に直結する。ここで時間をかけ過ぎないことが特に重要である。したがって、単に一度解けるようになるだけでなく、見た瞬間に判断できるレベルまで知識を定着させておくことが望ましい。普段の学習では、単語帳や文法問題集を漫然と繰り返すのではなく、正確に表現を習得するよう意識し、「なぜその答えになるのか」を説明できる状態まで理解を深めておくことが大切である。特に、比較・関係詞・時制・仮定法・語法・イディオムなど、頻出分野は優先的に確認しておこう。

●実用的な英文に慣れ、必要な情報を素早く拾えるようにしよう

公募制推薦入試Ⅰ期（教科型）では、会話文だけでなく、広告や案内文、告知文など、日常生活や社会の場面を想定した英文が出題される。こうした問題では、文章を最初から最後まで丁寧に読むだけでなく、「何についての資料か」「どこに重要な条件や制約が書かれているか」を素早く見抜く力が必要である。例えば、日付・料金・条件・注意書き・対象者などは、設問で問われやすいポイントである。試験対策として、学校教材に加え、大学入学共通テスト等に見られる案内文や広告、ポスター風の英文にも触れ、必要な情報を短時間で拾う練習をしておきたい。

●長文は「全部を完璧に読む」より「設問に応じて整理して読む」意識を持とう

長文読解では、すべての英文を完璧に読むのではなく、設問で問われている箇所や論点を意識して読むことが大切である。特に、公募制推薦入試Ⅰ期（教科型）では、会話文・実用文・説明文など複数のタイプの英文が続けて出題されるため、1題に時間をかけ過ぎると全体が苦しくなる。そのため、設問を先に確認し、何を探しながら読めばよいかを明確にしたうえで本文に入る習慣をつけておこう。また、選択肢問題では、主語だけが異なる等、本文と少し表現を変えて正解・不正解が作られていることも多いため、本文の該当箇所に立ち返って根拠を正確に確認する姿勢が重要である。こうした練習を重ねることで、安定して得点できるようになるだろう。

●時間配分と解く順序を意識し、本番で得点を取り切る力を養おう

公募制推薦入試Ⅰ期（教科型）では、設問そのものは標準レベルであっても、限られた時間の中で複数形式の問題を処理しなければならない。そのため、知識を身につけるだけでなく、「どの問題にどれだけ時間を使うか」を意識した演習が重要になる。加えて、一般入試よりも入試時期が早いいため、十分な対策が整わないまま本番を迎えてしまう可能性もある。時間配分がうまくいかず、本来の力を発揮しきれないことのないよう、早い段階から実戦的な練習を積んでおきたい。例えば、第1問～第3問のような比較的短い問題では、迷い過ぎずに処理する力が必要である。一方、第4問以降の読解問題では、すべての英文を完璧に読むのではなく、設問で問われている箇所や必要な情報を意識しながら読むことで、時間を有効に使うことができる。特に広告や案内文では、本文全体を精読するよりも、必要情報を素早く拾う姿勢が有効である。また、演習の際には「時間内に終わったか」だけでなく、「どこで時間を使い過ぎたか」まで確認しておくことよい。本番で安定して得点するためには、英語力そのものに加え、問題形式に応じた時間の使い方を身につけておくことが大切である。日頃から制限時間を意識した演習を積み重ね、本番で焦らず解き進められる状態を作っておきたい。形式が同じであることから、一般入試の問題を解くことも有効である。

数 学

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
11/22	第1問	数学Ⅰ 数と式／2次方程式・2次不等式／データの分析	やや易
	第2問	数学Ⅰ 2次関数	標準
	第3問	数学Ⅰ 図形と計量	やや難
	第4問	数学A 場合の数と確率	標準
11/23	第1問	数学Ⅰ 数と式／三角比／集合と論理	やや易
	第2問	数学Ⅰ 2次関数	標準
	第3問	数学Ⅰ 図形と計量	標準
	第4問	数学Ⅰ・A 場合の数と確率／データの分析	標準

※2026年度より公募制推薦入試Ⅰ期（教科型）は2日程実施となった。

●出題形式

公募制推薦入試Ⅰ期（教科型）の試験時間は2科目120分で、数学はそのうち概ね60分を充てる形式である。大問は4題で、すべて必答である。

解答形式は、当てはまる数値または適切な選択肢の番号をマークするマークシート方式である。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

数学Ⅰ・数学A（図形の性質・場合の数と確率）

b. 出題内容

第1問は両日程とも小問集合で、数と式を軸に、2次方程式・2次不等式、データの分析、三角比、集合と論理などから複数の単元が取り上げられている。第2問は両日程とも2次関数の総合問題で、係数決定、最大最小、平行移動までを順に辿る構成である。第3問は図形分野からの単独テーマで、11月22日は立方体を用いた空間図形、11月23日は円に内接する四角形を扱う平面図形であった。第4問は場合の数と確率を中心とするテーマで、11月23日ではこれにデータの分析が組みあわされている。

●問題の傾向

第1問は基本事項を問う小問集合で、各小問が独立しており、教科書傍用問題集レベルの計算力で十分に対応できる。第2問の2次関数は、通過点や頂点の条件から係数を決める前半と、最大最小やグラフの移動を扱う後半の二段構えになっており、小問間の結び付きは比較的素直である。

第3問・第4問は1つの題材を深掘りする単独テーマ型で、複数の小問が密接に連なった誘導問題として出題される。前問で求めた長さや確率が次の小問の入り口になる作りのため、途中で1つ計算を間違えると後半まで波及しやすい。第4問は場合の数と確率を中心に据えた構成だが、日程によってはその大問の中にデータの分析の設問が独立した小問として並ぶこともある。確率とデータの分析のどちらも、手を抜けない単元としてとらえておきたい。

全体として、初手から難解な設問が置かれているのではなく、前半の小問で値を準備し、それを後半で使い回していく誘導型の構成が軸となっている。流れを読み切れれば大きく崩れない一方、入り口の条件整理を誤るとその大問を丸ごと落としかねない。

●難易度

教科書レベルの基本事項・基本解法を確認する問題や入試頻出の典型問題がメインで、基礎～標準的な内容がほとんどである。第1問・第2問は典型的な計算問題が中心で、落ち着いて手順を踏めば得点できる。第3問・第4問には計算量が多く、誘導を慎重に辿る必要がある設問も含まれる。後半の単独テーマでは、日程によって他の大問と比べて手数が一段増える場面があり、確率とデータの分析を組みあわせて処理させる年もある。前半で確実に得点を保しつつ、後半の単独テーマに十分な時間を残せるかどうかがかが合否のわかれ目となる。

数 学

学習対策

●数学Ⅰ・数学Aの内容を満遍なく押さえる

出題範囲が数学Ⅰ・数学Aに限定されているからこそ、この範囲内での穴が即座に失点につながる。相山女学園大学の公募制推薦入試Ⅰ期（教科型）では、年度によって第1問の小問集合や第4問の中に、どの単元の小問が組み込まれるかが変わる。例えばデータの分析は、11月22日では第1問の小問として、11月23日では第4問の中の独立した小問として登場している。小問単位の出題とはいえ、限られた問題数の試験で1問を落とす影響は小さくなく、演習量が少なくなりがちな単元を残したままにしておくと、そのまま得点差に表れる。

学習を始めるにあたっては、単元ごとの強弱をつけずに、まずは数学Ⅰと数学Aを一巡させておきたい。そのうえで、自分の手が止まりやすい単元を洗い出し、そこに演習時間を多く振り分けていく。「苦手を残したまま運任せで本番に臨む」という形になると、その年に限ってその単元が出たときに立て直しが利かない。

●単独テーマ型への慣れを作る

第3問・第4問はいずれも1つの題材を細かく掘り下げる形式で、小問同士のつながりが強い。この形式に対応するには、個別の公式を知っているだけでは足りず、設問の条件を整理し、与えられた値から次に何を求めるべきかを自分で判断する訓練が要る。

過去問やマークシート方式の問題を素材に、時間を区切らずに全小問を自分の手で解き切る練習を積むとよい。途中で手が止まったら、止まった理由を一度書き出しておく。「条件の読み取りで迷ったのか」「定理の選択を誤ったのか」「計算過程でミスをしたのか」を区別しておくと、同じ種類の詰まりを減らしていける。何題かこなすうちに、初見の題材でも条件整理から方針決定までの流れが自分の中で固まってくる。

●図形の定理を引き出せる状態にしておく

第3問は毎年の定位置として図形分野から出題されており、得点を確保するうえでの要になる。空間図形では三平方の定理や座標の導入、平面図形では余弦定理・正弦定理や円周角まわりの性質といった、数学Ⅰ・数学Aで学ぶ定理を、場面に応じて使い分けられるようにしておきたい。

公式を暗記するだけでは足りず、「どの条件が揃ったときにどの定理が効くのか」を感覚として持っていたい。演習のときに、自分が選んだ定理について「なぜそれを選んだのか」を頭の中で一度言葉にしてみると、道具の使い分けが定着しやすい。図形問題はこの入試における安定した得点源になり得る。

●本番で崩れないためのリズム作り

マークシート方式では、途中の式がどれだけ正しくても、最後の1マスを誤れば得点にならない。本番で焦らないためには、日頃の演習から「書き終わった直後に数値を見直す」ところまでをひと続きの動作として習慣づけておきたい。

また、ある小問で詰まったときに、そこに固執せず一度離れて次に進む判断も大切である。マークシート方式なら戻って答えることはいつでもできる。手が止まった大問に時間を取られ過ぎず、点が取れる問題から確実に拾っていく進め方を身につけて、当日は落ち着いて臨んでほしい。

国 語

出題傾向

入試日程	大問	出典	難易度
11/22	第一問	木原武一『天才ほどよく悩む』	標準
	第二問	柴田元幸「裏切り者にならないために」	標準
11/23	第一問	阿部謹也『甦える中世ヨーロッパ』	標準
	第二問	今福龍太『霧のコミュニケーション』	標準

※2026年度より公募制推薦入試Ⅰ期（教科型）は2日程実施となった。

●出題形式

長文形式の総合問題であり、基本的に五肢択一のマークシート方式である。2つの大問で構成されており、11月22日は2題とも現代文の範囲から評論文が、11月23日は現代文の範囲から評論文と随筆が出題された。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

現代文は評論文と随筆が出題されている。古文・漢文は出題されていない。

b. 出題内容

2026年度は2回の選考が行われた。ともに現代文が2題出題され、11月22日は評論文形式が2題で、『善の研究』で有名な西田幾多郎の伝記を通して「悩み」について考察を行う文章と、翻訳を通して異文化理解について考察を行う文章が出題された。11月23日は評論文形式のヨーロッパ史の本質を考察する文章と、バラク・オバマ元大統領の広島演説に触れながら広島に関する思索がつづられた随筆が出題された。総じて主張のわかりやすい文章であった。

●問題の傾向

設問内容は、漢字、類義語、語句の意味、接続詞、文の空所補充、傍線部の内容説明または理由説明、内容一致（不一致）など、いずれも現代文入試の定番問題である。設問数は第一問が11問（マーク数16）、第二問が9～10問（マーク数10～11）であった。ただし、11月23日では随筆が出題されたため、評論文におけるものとは異なる趣旨の設問が見られた。具体的には、心情理解や文章構造に関する設問が出題された。

11月23日の第二問は約4,700字と長めだが、ほかは約3,700～3,900字程度であった。設問内容は漢字、語句・慣用句の意味を問う問題、空所補充問題（接続詞・語句など）、内容理解に関する問題、問題文の趣旨などである。

●難易度

2026年度の公募制推薦入試Ⅰ期（教科型）は、評論文ではいずれも引用の含まれた文章が出題されており、複数の意見を比較しながら読解しなければならない文章であった。いずれも文章の内容をしっかりと理解できれば設問に苦勞することはなかったと思われるが、課題文の読みにくさが試験全体の難度を高めている。また、11月23日の第二問では随筆が出題されており、事前に対策を行っていなかった受験生には難しく感じられたかもしれない。課題文はやや読みづらく、それが試験全体の難度を引き上げている側面はあるが、設問自体は標準的な出題がなされているため総合的な難易度は標準的といえる。

国語

学習対策

●長文を読み解き、筆者の主張をとらえよう

2026年度入試では問題文の分量の増加が見られたことから、5,000字程度の評論文を読み解く練習が必須である。国語の試験時間を60分として、その時間で2大問を解く必要があるため、自分なりの時間配分を決め、1大問に費やす時間の半分で文章を読む練習をしよう。問題集の文章を読むのもよいし、新書を5,000字程度のまとまりごとに読んでいくのもよい。その際、ただ漫然と読むのではなく、文章構成や筆者の主張をとらえることが大切である。評論文の筆者は自分の主張を伝えるために文章を書いているが、それをわかりやすく伝えるために、具体例をあげたり、自分の主張と他者の考えを対比させたり、比較したりしている。評論文を読むときには、まず冒頭部分から話題（文章のテーマ）をとらえ、筆者の考えと具体例、筆者の考えと他者の考えといった区別をしながら読み、筆者の論の展開を正確に把握するようにしよう。これらを押さえておくと、設問にも答えやすくなる。

●知識問題で確実に得点できるようにしよう

椋山女学園大学の入試では、第一問・第二問を通して漢字や語句の意味など、知識を問う設問が出題されている。特に漢字の出題は多く、同音異字の中から正しい漢字を選ぶ問題が必出である。漢字の問題集や参考書に取り組み、熟語単位で漢字を覚えたり、漢字の意味を覚えたりすることで、同音異字を区別できるようにしよう。

●マークシート方式の問題に慣れよう

設問はすべてマークシート方式による選択式である。選択肢の中から正しいものを選ぶ練習のために、大学入学共通テスト対策の問題集やマークシート方式の私立大学対策問題集に取り組もう。選択肢の中には、ほんの一部だけが本文の内容と違ったり、本文からは読み取れない内容が含まれていたりする場合がある。迷ったときには常に本文に立ち戻り、本文と選択肢を照らしあわせて判断するようにすること。また、本文の分量も設問数も多めであるため、過去問に取り組んで、時間配分の練習をしておくといよい。マークシートにマークするときには解答番号を確認することも習慣づけておこう。